

「戦場の村」に学校贈る

調査団員として参加した平松さんの印象

日教組の第2次「カンボジア教育支援」調査団（十人）の中四国代表として、日教組総務吉備支部専従の平松良夫さん（せいし）倉敷市下庄Ⅱが、同国の「戦場の村」を訪れて学校一棟



を贈り、このほど帰国した。平松さんは「子どもたちは純朴で学ぶことに飢えており、日本人が忘れかけている本来の教育の姿を考えさせられた」と話す。

真新しい机で久々の勉強 みんなの目が輝いていた

小学校を贈ったのは、バタンバン州のクオ村。タイ国境で、最近までポル・ポト派の勢力圏だった。一行は二月中旬、自動小銃を抱

贈った新校舎は木造平屋の五教室。屋根はれんが。雨期に飲み水をためるタンクと、トイレも付いていた。隣のトタンぶきの元小学校は戦争で荒れ果て、壁がはがれ、あちこちに「地雷注意」の張り紙があっ

た。地雷は、同国に三百万個も埋められているそう

村人が繰出で出迎えた。子どもたちが真新しい机、いすに座り、授業を受けた。久々の勉強で、みんな、目が輝いていた。授業

は午前、午後の二部制。先生も、賃金が生活費の四分の一なので、半日をアルバイトに費やす。同州をポルト派が完全制圧している一九七五―七九年、先生の七五%が殺されたとい

贈呈式の後、政府軍に守られ昨年学校を贈った、さらに奥地の「キロ38村」へ。屋根に大砲を付けた戦車に出くわし、銃弾痕の残る倉庫が幾つも見えた。バタンバン市からプノンペンへの帰途は、内務省の

「車は危険」という判断で、飛行機に切り替えた。戦闘情勢は刻々と変化しているようだった。

平松さんは、民間ボランティアに言われた。「日本の援助は多いが、教育予算に使われる金額は最低。経

済進出、利益追従型の援助ではダメだ」。カンボジアは相次ぐ戦乱で、十五歳以下の子が人口の四七%（三百九十万）を占める。

